

【まとめ・講評】

藤原 旅人氏

1点目が、皆さんの現状の活動に対しての“反省や振り返り”を見てみると、ほぼネガティブな人がいらっしやらないので、皆さんは“各々の活動にプライドをもってやられているのだな”ということがわかりました。

2点目は、さらにその上で、“自分たち自身で出来ること、改善したいようなことを言われている方が、多かった”と思います。自分自身の中で、ボランティア活動をやる意味を振り返ったり、学びの場を設けたり、あるいは研修をしたり、自分たちのやっている活動の質、クオリティを上げるために何かをやりたい、ということが見受けられました。

3点目が、今日の大きなテーマにつながる部分ですが、“ここにいない人をどう巻き込むか”について触れられていました。参加していない人に情報をどう伝えるのか、その方法としては SNS なのか、それとも他の方法で草の根でやっていくのか、いろいろあると思いますが、その情報を伝える時に、自分たちだけでは難しいのでコーディネーターが必要だとか、その情報発信をやってくださる“専門的な方も新しい人材としていると良いなあ”との話がありました。さらには、そういう方々が活動に加わってくださるための“資金”はどうすればいいのか、自分たちの組織だけでは難しいので、いろいろな方の助けが必要であるとの意見があった、と思います。

今日の1点目と2点目に関しては、自分たちの力、現状の力で対応出来るのではないかと、思います。また“横のネットワーク”と書かれていた方もおられましたが、もう既にここでネットワークが出来ていますし、ここにいない方についても、ネットワークをお持ちでしょうから、今日できることと、今、出来なければ、どうすれば良いかは考えていく必要があるのかな、と思いました。

柴田 英杞氏

藤原さん、有難うございました。

【質問】

柴田 「少し私のほうから質問させていただきます。

B班ですが、Will もなく、Can もなくなっています。最初の頃は Will も Can も付箋があったように記憶していますが、どうして無くなったのか？ しかも課題山積領域のところに、どうしてこんなに沢山貼り付けられたのでしょうか？ 未来はないのですか（笑）。これはすごく気になっていますが、どうしてですか？」

【B班の答え】

「Will Can Must、それぞれ初めはありましたが、課題解決のところに集約したような形になりました。

横のネットワーク・縦のネットワークという観点から説明しますと、“人員の問題”が横のネットワークで、“ノウハウの情報の共有”というのが縦のネットワークです。

横のネットワークというのは、短期的には現代のボランティアで、どうやって有効活用していくのかということです。横のネットワークをつなげればボランティアのメンバーに呼び掛けて、一緒に参加してもらおう。もちろん地域的な限界はありますが、現状はなかなかそのようにうまくいっていない、ということが問題です。横のネットワークを改善すれば、大概の場合は対応できるということではないか、ということです。

それから研修の実施とか、会員を増やすとかも有効です。

研修は、もちろんその中味が問題で、例えば情報交換の中で、“私たちのところは、こんな研修をやっているよ”とか、“そんな研修ならいいですね、われわれも参加したい！”と、そういった情報交換があったら、合同研修みたいなものもいいのではないかと、触れています。」

柴田 「お話を聞いていると、グループの目指すべき姿と、この課題解決が同じような括りになっていますね、そうではないですか？」

【B 班の答え】

「最初は全部、それぞれの楕円の中に散らばっていましたが、グルーピングしていく間に、どんどん真ん中の課題解決の枠の中に入っていました。」

3つの大きなテーマがありますが、“ネットワーク”と“人材”と“研修”という3つに全部集約されて、真ん中の枠の中に全部入ったということです。」

柴田 「そうでしたか。もう少し議論の時間があったら集約した後に、『そのうえで目指すべき姿は、どういうものがあるか』というところに議論が移ればよかったですね。」

柴田 「次に、気になったところで、H 班にお伺いします。」

「会社員の目指すべき姿は、どういうものがあるか、50代にボランティア教育はできないものだろうかという、この切実な課題解決はどういう意味でしょうか？（笑）、私も50代なので、気になってまして（笑）」

【H 班の答え】

「今は、会社では、第二の人生ということで余暇をどう過ごすか、という議論があるようですが、それに加えて、『定年後はボランティアもいいですよ！』みたいな、そういう教育というか研修などを少し入れてもらったら、60歳とか65歳での定年後に、『自分はこういうボランティアがいいな』と、すんなりと入っていけるのではないかなあ、という意味です。」

藤原 「それはなかなか余暇（※良か）ですね。」 ※福岡の方言・・余暇と掛ける

「これは福岡でしかわかりませんよ（笑）」

会場内を回って歩く中で、ある班の方からの話ですが、奥さんから定年前ぐらいに、ちょこちょここと、『あなたボランティアもいいよ』とかのアドバイスがあったとか。

要するに奥さんと子供さんが、このように突つけば良いわけですね。

『お父さん5年後、何やりたいの?』って、突ついていけば良いじゃないのかな、と思っているわけですね。」

柴田 「じゃあ奥様が、旦那さんを突つくのですか?」

藤原 「そうですね、身内からのプレッシャーとか、“外部からもあります”みたいな感じで外と内から圧迫していく、そういうシステムは良いのではないかなと思います、いかがですか!」

柴田 「いかがですか!男性の皆さま。でも会社員だったら会社でそういう社員教育をしたら良いような感じですか、第二の人生に向けて。」

柴田 「C班ですが、このクロス(MustとWillのクロスが“改善”と、CanとWillのクロスが“強化”、MustとCanのクロスが“怠慢”)のところには何も入ってないですが、これはどういう意味ですか?

“改善”もなし、“強化”もなし、なんか“怠慢ゾーン”のような感じですか?」

【C班の答え】

「ないわけではありません。MustとCanのなかに両方入っているので、ここにあってあげてなかっただけです。下のゾーンの怠慢のところは、怠慢とは言い難いですが、“広報”と“研修”が少し入っています。ここはやっているけれども、もっとやらなくてはいけないという認識があるのが広報と研修の2つです。」

柴田 「あー、掛かってるんですね、こっちとこっちに。あー分かりました。ありがとうございます。そうですか。それで課題解決が広報と会員増となっているのですね。分かりました。」

柴田 「藤原さん何か個別質問は。」

藤原 「僕は、F班の“食べ物”と“飲み物”についての言及がすごく気になります。」

柴田 「そうですね。わたしも聞きたいです。人参でなんか釣る、っていう感じですね。」

F班」

【F班の答え】

「はい、すみません、それは私が書きました(笑)。」

「学生は何が欲しいかっていうと、お金が欲しいわけですね。お金に代わる物としては“食べ物”と“飲み物”が欲しいわけですね。たとえバイト代が出なくても、昼ご飯がでるとか、酒が少しでも出ると言う、スイッチが入る人がいますから。全員が全員じゃないですよ。そういった食欲をくすぐるような、そういう作戦を是非皆さん使われたほうが良い、と思います。」

柴田 「ありがとうございます。」

藤原 「だんだん、小出ゼミの裏側がわかってきました(笑)。どう学生を運営しているのかという(笑)」

柴田 「実態がわかってきましたね（笑）。小出ゼミの方、何か異論反論はありませんか」

藤原 「やっぱり、ここはもう高山君でしょう（笑）」

高山 「いやー！反論とかじゃないですけど、ボランティアの意義として、子供たちとの交流とか、ごみ拾いだとかであれば、やり甲斐はあると思います。うまみの人参だったり、見返りって言うのは無くても良いと思います。震災とかのボランティアで見返りを求めてこられても、向うが迷惑じゃないですか。

やはり現地の人が一番つらいので、見返りを求めてこられるよりは、自分たちの参加する意義を持って行くというのがボランティア、社会奉仕の理念に叶っているのではないかなという、僕の意見です。」

拍手！！

柴田 「ありがとうございました。すごいですね。

それでは、そろそろ予定の時間となりましたので、今日のフォーラムはこれで終了したいと思います。今日のフォーラムは、『若者と文化ボランティアの出会いの場』というのが一つの大きなテーマになっていました。やはり若い方々が入りますと、今のようにはじめて未来につながっているな、という希望が持てますね。

今日は場が明るくなりましたし、藤原さんのように若くてボランティアの研究をされている方もいらっしゃると、これも未来が明るいな、という感じがいたしました。やはり若い方々とディスカッションするのはいいですね。（拍手）若返りますよね。

本当に今日は元気をいただきまして、ありがとうございました。」

「つたない進行でみなさんにはいろいろご迷惑をおかけいたしましたけれども、これで終わりたいと思います。」

司会 「ありがとうございました。いい勉強になりました。それではアンケートのほう恐れいりますが、皆さま、お急ぎでしょうが、よろしく願いいたします。

それから後方にチラシなど、私たち『とびうめの会』の活動報告などいろいろ置いていきますので、よろしければお持ち帰りください。

先生方にもう一度、大きな拍手で、お礼を申し上げたいと思います。

ありがとうございました。」